



Ben Jonsonとチャペル・ロイアル少年劇団 : Every Man Out of His Humour 創作上演時期を中心として

著者	佐野 隆弥
雑誌名	文藝言語研究
巻	75
ページ	47-62
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00154954

Ben Jonsonとチャペル・ロイアル少年劇団 ——*Every Man Out of His Humour*創作上演時期を中心として

佐 野 隆 弥

1. イントロダクション

演劇史的見地から見た時、世紀転換期の、王朝交替期には2つの注目すべき現象が生起している。1つは諷刺文化の勃興であり、もう1つは少年劇団の再活動であるが、この時期になぜ少年劇団の活動再開が可能となったのかという問題に関しては、十分な解答は提示されてこなかった。著者は、その要因解明の最初のステップとして、この現象と並行関係にあった詩人戦争を引き起こすきっかけになったと考えられている *Histrionastix* という戯曲の分析を行い、それを通して、法学院劇としての *Histrionastix* の可能性、再活動前後のセント・ポール少年劇団の状況、1599年6月1日の John Whitgift と Richard Bancroft による諷刺詩禁書令 (Bishops' Ban) を受けての John Marston の振る舞いなどの報告を行った。¹

本論では、それを踏まえ、プロジェクトの第2ステップとして、*Histrionastix* によって触発されたと考えられている Ben Jonson の反応に着目し、チャペル・ロイアル少年劇団の活動再開を視野に入れた Jonson の動向や環境を、特に自作の上演劇団選択を中心に探究し報告する。

では、先ず、*Histrionastix* と Jonson との関わりを、確認しておこう。詩人戦争と呼称される事象は、*Histrionastix* におけるあるキャラクターの造形と、銜学的な neologism (新造語句) に反発した Jonson が、*Every Man Out of His Humour* (以下、*Every Man Out* と略記) の中で諷刺を用いてやり返し、それをきっかけに John Marston と Jonson との間で諷刺合戦が展開され、さらには Jonson が Thomas Dekker まで諷刺の標的にしたことから、Dekker もこの戦争に参戦した、と通常は記述されている。

CLOVE Now,sir, whereas the ingenuity of the time and the soul's *synderisis* are but *embryons* in nature, added to the paunch of *esquiline* and the

intervallum of the zodiac, besides, the ecliptic line being optic and not mental, but by the contemplative and theoric part thereof, doth demonstrate to us the vegetable circumference and the ventosity of the tropics, and whereas our intellectual or mincing capriole, according to the *Metaphysics*, as you may read in Plato's *Histriomastix* ---you conceive me, sir?

ORANGE Oh, Lord, sir!

(*Every Man Out of His Humour* (Q), 3.1.183-92, underlines mine)²

ここに引用した台詞は、いま言及した *Every Man Out* における、詩人戦争勃発の証拠の痕跡と考えられている一節であり、場面の背景を説明しておけば、気取り屋の Clove が友人の Orange 相手に、もったいぶった語句を連ねることで、周囲の洒落者たちにこれらのナンセンスな表現が学術的タームであるのかのとき印象を与えようとするところである。

Histriomastix の作者が誰であれ、上記引用に施した下線部の大半が、Marston の諷刺詩 *The Scourge of Villanie* においても確認でき、後に *Poetaster* の中で、*Histriomastix* の中心人物 Chrisoganus を当てこすった “Crispinus” という名前で登場させられた Marston が、Jonson の敬愛する Horatius を意味する Horace から薬を飲まされ、大量の語句を嘔吐させられるという復讐を受ける筋書きから考えても、Marston や *Histriomastix* が、西洋古典に精通した知識人を自負していた Jonson のポエティクスの規範を犯していたことは明らかである。

2. *Every Man Out* の構造から考える

上記の引用は、詩人戦争を主題とする多くの先行研究において、それ単体でのみ取り上げられ——つまり、*Every Man Out* という戯曲全体の構成の中に位置づけた上で、議論されてはこなかった。そこで、このセクションでは先ず、*Every Man Out* について分析し、その上で上記の一節が有する機能や意味について考えてみたい。

Every Man Out は、Jonson のペルソナである諷刺劇作家 Asper が、観劇に招待した友人の Cordatus と Mitis に向かって、これから上演される自作の意図について語るところから開始される。365 行もの行数を費やして展開されるこの序幕では、特定のヒューモアの過多による悪弊を観客に呈示し、同時に社会の悪を暴露するというこの劇の目的が語られるが、Asper 自身は直後の劇におい

て役者を務めなければならないと言い残して途中で退場し、序幕の管理はこのCordatusとMitisの2人組に委ねられることになる。

この2人組は、序幕に続く戯曲本体の中においても、展開の切れ目ごとに頻繁に介入し、直前のアクションに批評家としてのコメントを付与するのであるが、ここにはあからさまに観客の反応を制御しようとするJonsonの影が透けて見え、その上*Every Man Out*という戯曲本体を序幕の中に囲い込むことによって、一種の劇中劇化する構成とも相まって、この芝居全体を完全にコントロールしようとするJonsonの姿が、誰の目にもより一層鮮明に映る仕掛けとなっている。

さて、*Every Man Out*本体のプロットだが、ここには有機的な展開を伴うアクションと呼ぶに値するものは、十分には存在しない。主な流れは4つあり、要点のみを紹介すれば、(1) 騎士のPuntarvoloが犬と猫を連れてコンスタンティノーブルのトルコ宮廷まで旅行し、無事にロンドンまで帰国できるかを、宮廷人のFastidius Briskと賭けをするという展開、(2) 高利貸しで恐妻家のDeliroとその妻Fallaceのカップルに、Fastidius Briskとの不倫が絡む展開、(3) 天候不順のため暴騰した小麦を利用して暴利をむさぼった農夫のSordidoが、好天続きのため自殺未遂を試みるという展開、そして(4) Sordidoの息子で法学院生のFungosoが、宮廷人のファッションに入れ上げ、同時に、同じくSordidoの弟でジェントルマンの地位にあこがれるSogliardoが田舎者の無骨さを宮廷でさらけ出すという展開、の4件となる。

*Every Man Out*で描出されるヒューモアの状態は、*Volpone*などと比較すれば、病的と呼べるほどのものではなく、「いささかエクセントリックな性格」の範疇に収まる程度のものであり、こうした個性の持ち主たちの度を越えた振る舞いと、その行き過ぎに対する反省（ちなみに、この反省こそ本劇のタイトルの“Out of His Humour”の意味となる）がもたらす「ヒューモア抜け」とが、*Every Man Out*の内実と言ってよい。

ところで、序幕の途中で姿を消したAsperだが、戯曲本体では、有能な学者であるにもかかわらず十分な評価を得られないために、ねたみの発作を起こすと定義され、その意味で他のキャラクター同様、嫉妬というヒューモアに取り憑かれたMacilenteという役を演じることになるが、このMacilenteと道化のCarlo Buffoneとが放つ諷刺的なもののしりとあざけりとが、「コミカル・サタイア」と銘打たれた*Every Man Out*の中軸を担うことになる。

さて、*Every Man Out*の主要なプロットと構造の解説はこのあたりにして、

このセクションの焦点である先の引用の分析に取りかかろう。この一節が配置された第3幕第1場は（あるいは、このシーンも、と言うべきかも知れないが）、Jonsonの観客（もしくは、読者）への介入が露骨に現れている場面である。最初にShiftというペテン師が登場するのだが台詞はなく、その代わりに、例の批評家の2人組が、20行も費やしてShiftの名前や仕事の内容を観客に説明する。その後Shiftは、次に登場してきた問題のCloveおよびOrangeと挨拶程度の会話を15行ばかり交わすのだが、またもやここで2人組が劇の流れを中断し、今度はClove等の紹介を行う。

MITIS What be these two, signor?

CORDATUS Marry, a couple, sir, that are mere strangers to the whole scope of our play---only come to walk a turn or two i' this scene of Paul's by chance.

(Every Man Out of His Humour (Q), 3.1.37-40)

「この2人は何者でしょう」, 「ただのよそ者だよ, この劇の中身には何の関係もないところのね. この場面の舞台であるセント・ポール寺院にたまたまぶらつきに来た連中さ.」 “mere strangers to the whole scope of our play” と, こともなげに言い切る Cordatus——あるいは, その背後に控えている Jonson のあけすけな干渉ぶりに, われわれは驚かされるが, さらに畳みかけるように, Clove等が知的見せかけの機能に特化したキャラクターであることを強調する。

第3幕第1場はこの後, 先に紹介した Puntarvolo が動物を連れて船旅に出る話題に言及したり, Fastidius Brisk が宮廷の作法について指南したり, ジェントリーにあこがれる Sogliardo が紋章を購入した話題が言及されたりと, 要するに上流階級もしくはそこを志向する人物たちやそれに関連する話題が舞台をにぎわす訳だが, おそらくは舞台の片隅をぶらついていた Clove 等は, こうした上流の洒落者たちに目一杯のアカデミックな見せかけを試みる。

CLOVE Monsieur Orange, yond gallants observes us. Prithee, let's talk fustian a little and gull 'em, make 'em believe we are great scholars.

ORANGE O Lord, sir!

CLOVE Nay, prithee, let's, by Jesu. You have an excellent habit in discourse.

ORANGE It pleases you to say so, sir.

CLOVE By this church, you ha', la! Nay, come, begin.---Aristotle, in his *Daemonologia*, approves Scaliger for the best navigator in his time; and, in his *Hypercritics*, he reports him to be *Heautontimorumenos*. You understand the Greek, sir?

ORANGE O God, sir! (*Every Man Out of His Humour* (Q), 3.1.168-80)

「あの洒落者たちをだまして、われわれが立派な学者であるよう信じ込ませよう。」洒落者たちに認識されてもいないのに、自意識過剰に「見られている」と思い込み、碩学であるように見える、見栄を張った会話を提案するCloveは、劇とは何の関係もないと言い切るJonsonの解説にもかかわらず、*Every Man Out* 全体の構図に置いて考えれば、十分ヒューモアの過剰に毒された存在と言うことができる。だが、詩人戦争研究で問題とされる一節は、こうした劇的展開の中で、意味は二の次、とにかく難解な響きを有するタームを連発してやれという、学者を気取った見栄から発話されたものであった訳である。

3. Clove-Orangeシーンの特異性

Every Man Out のこうした有機的連結を欠く戯曲構成、個別症例的に呈示されるヒューモアの過剰などを考慮に入れるならば、問題の一節を中核とするClove等の登場シーンは、1つのケース・スタディのエピソードとして考えることも可能かも知れない。しかし、先に紹介した本劇の4つのプロットは、*Every Man Out* という戯曲全体を通して展開されていること、また各種のヒューモアの過剰を体現していたキャラクターたちも、それがもたらす悪弊や社会への悪しき影響を認識し反省したり、自己の愚考に気付いたりすることで、「ヒューモア抜け」を果たすという結構を特徴としていた。ところが、CloveとOrangeのやり取りは第3幕第1場の一部分に限定されたものであり、両者が学者気取りの会話を中止するのも、洒落者たちに注目されてはいないことに気付いたからに他ならない。このように、問題の一節が*Every Man Out* の他の劇的イヴェントとは顕著な相違を見せていることは重要であり、このことは、やはりJonsonが何らかの意図を持って挿入した、と考えることが妥当である根拠となると思われる。

ところで、本劇の前作*Every Man in His Humour* (以下、*Every Man in* と略記)が、1601年に出版されたクォート版では総行数4,500行を数え、宮内大臣一

座による実際の上演では、そのかなりの部分が削除されたことが疑われているように、*Every Man Out*も同様に、1600年に刊行された第1クォート版では優に4,500行を超えているため、Clove等のやり取りが舞台に掛けられたかどうかは定かではない。ただ、そのことは、ポエティクスをドラマトゥルギーの上位に置いていたJonsonにとっては、問題ではなかったはずである。表現を換えるならば、Marstonの諷刺詩や*Histrionomastix*によって自らの信奉するポエティクスを侵害されたJonsonにとり、何らかのメディアを通して——可能であれば、印刷された「詩」というメディアを通して——意思表示をし、その「悪弊」を矯正することこそが重要であったからである。

4. Jonsonのポエティクスと演劇

Jonsonが、当時の演劇産業というシステムの中で劇作家の役割を果たすことに、満足感を抱いてはいなかった、あるいは反発を感じていたことはよく知られている。このセクションでは先ずそのことを、*Every Man Out*前後の戯曲から2例引用して例証しておこう。

*Every Man Out*の前年、1598年に上演された*Every Man in*は、先に言及した1601年のクォート版と、“*Workes*”とのタイトルを掲げた1616年のフォリオ版の巻頭に収められたものとは、その姿を大きく変えている。舞台の設定がイタリアのフィレンツェからロンドンに移され、キャラクター名も英語化されただけではなく、戯曲の終盤にかなりの削除の手が入れられているのだが、そのカットされてしまった台詞の中に、*Every Man in*執筆・上演・出版の時期に、Jonsonが抱いていたであろう重要なポエティクスあるいは詩人論を窺わせるパッセージが存在する。

But view her [=poesy] in her glorious ornaments,
Attirèd in the majesty of art,
 Set high in spirit with the precious taste
 Of sweet philosophy, and, which is most,
Crowned with the rich traditions of a soul
 That hates to have her dignity profaned
 With any relish of an earthly thought:
 Oh, then, how proud a presence doth she bear!

Then is she like herself, fit to be seen
Of none but garve and consecrated eyes.
Nor is it any blemish to her fame
That such lean, ignorant, and blasted wits,
Such brainless gulls, should utter their stol'n wares
With such applauses in our vulgar ears,
Or that their slubbered lines have current pass
From the fat judgements of the multitude,
But that this barren and infected age
Should set no difference 'twixt these empty spirits
And a true poet...

(*Every Man in His Humour* (Q), 5.3.272-90, underlines mine)

Every Man in という戯曲は、同時代のシティ・コメディの典型的な主題である、父親の息子に対する認識のズレをフレームワークとして展開される喜劇だが、本劇の場合、もともと息子が関心を寄せている詩作や学問に対する父親の懸念がアクションの原動力となっている。引用の台詞は、大団円においてその息子が父親に対して語る「詩」の擁護論の一部だが、注目すべきは、「詩 (poesy)」と役者によって語られる台詞とが明確に区別されている点である。「poesy とは、豊かな伝統という王冠をいただいたものであり、謹厳で聖別された方々にふさわしいものである」一方、「無知で無能な馬鹿ども (=劇作家) が大衆の耳を喜ばせる台詞は、poesy とは縁もゆかりもない」といった趣旨だが、ここには Jonson の紛うかたなき戯曲蔑視が顕著に露見している。³

ところで、*Every Man Out* における (あるいは、この戯曲からの一層の)、Jonson によるコントロールの強化についてはすでに触れた通りだが、この流れは、*Every Man Out* に続く 1600 年上演の *Cynthia's Revels* においても止むことはない。チャペル・ロイアル少年劇団の再活動直後に提供された戯曲である *Cynthia's Revels* には、1601 年に刊行されたクォート版の巻頭に、ラテン語で “Praeludium” と銘打たれた一種の序幕が置かれ、登場した 3 人の少年役者たちが、直後に上演される作品の紹介や当時の舞台状況について議論を行う。

It is in the general behalf of this fair society here that I am to speak, at least the more judicious part of it, which seems much distasted with the immodest

and obscene writing of many in their plays. Besides, they could wish your poets would leave to be promoters of other men's jests, and to waylay all the stale apophthegms or old books they can hear of, in print or otherwise, to farce their scenes withal. That they would not so penuriously glean wit from every laundress or hackney-man, or derive their best grace with servile imitation from common stages, or observation of the company they converse with, as if their invention lived wholly upon another man's trencher.

(*Cynthia's Revels* (Q), Praeludium, 137-46, underlines mine)

この一節も、ブラックフライアーズ座に集まった上質の観客（“this fair society”, “the more judicious part of it”）に向けて語ることを意識化したパッセージで、当然のことながら、公衆劇場との差別化はもとより、戯曲提供者も“your poets”（この箇所では、一般大衆向きの韻文書き）と呼ばれていて、第2幕第1場でCupidとMercuryが交わす“poet”と“rhymers”の弁別に関する一節をも合わせて考えれば、⁴ 公衆劇場およびそこで上演される芝居、さらにはそれらを供給する劇作家たちを見下すJonsonの排除の視線は明らかである。

以上のように、Jonsonは彼独自の、極めてラディカルなポエティクスおよび大衆演劇へのまなざしを有していたのだが、それにもかかわらず、Jonsonの*Every Man in*ならびに*Every Man Out*は宮内大臣一座の手によって上演された、あるいはJonsonの視点から言えば、宮内大臣一座の統御を受けていた訳である。次のセクションでは、このあたりのJonsonのあがきを、彼の初期のキャリア——もしくは劇作家としての出発——をたどりながら、検証してみたい。

5. Jonsonの初期キャリアをたどる

まず、Jonsonの世紀転換期における創作関連活動の年表を呈示しておこう。

- 1597 Henslowe から 4 ポンド受領（7 月）、20 シリング受領（12 月）
- 1597 *The Isle of Dogs* 共作（7 月）のため投獄（8 月）
- 1598 Henslowe から 6 シリング受領（8 月）
- 1598 *Every Man in His Humour* 上演（9 月）
- 1598 Gabriel Spencer の殺人と投獄（9 月）
- 1598 Marston, *The Scourge of Villanie* 出版（1599 年に増補出版）

- 1599 諷刺詩禁書令発布（6月1日, Whitgift & Bancroft）
- 1599 Henslowe から 2 度 共作劇の支払い 40 シリングを受領（8月） + 20 シリング受領（9月）
- 1599 *Every Man Out of His Humour* 上演（9月ごろ）
- 1599 Marston, *Antonio and Mellida* 上演（10月, Paul's 活動再開後最初の舞台）
- 1600 *Every Man Out of His Humour* Q1-Q3 出版
- 1600 *Cynthia's Revels* 上演（5月, Chapel Royal 活動再開後最初の舞台？）
- 1601 *Every Man in His Humour* Q 出版
- 1601 *Poetaster* 上演（秋ごろ）
- 1601 Henslowe から 2 ポンド受領（9月）
- 1602 Henslowe から 10 ポンド受領（6月）
- 1603 *Sejanus* 上演

Jonson は、1594 年、22 歳のころ役者としての活動を開始したと考えられているが、その 3 年後、1597 年ごろから芝居の執筆にも着手している。なぜなら、同年に 2 度、Philip Henslowe から金銭を受け取った記録が残されているだけでなく、*The Isle of Dogs* を Thomas Nashe と共作した嫌疑で投獄もされているからである。Jonson は、翌年つまり *Every Man in* が上演された 1598 年にも Henslowe との関係を継続し、戯曲制作の対価を受領しているが、この両者の関係は、その後も 1599 年・1601 年・1602 年という具合に、*Henslowe's Diary* の最終部近くまで続いてゆく。

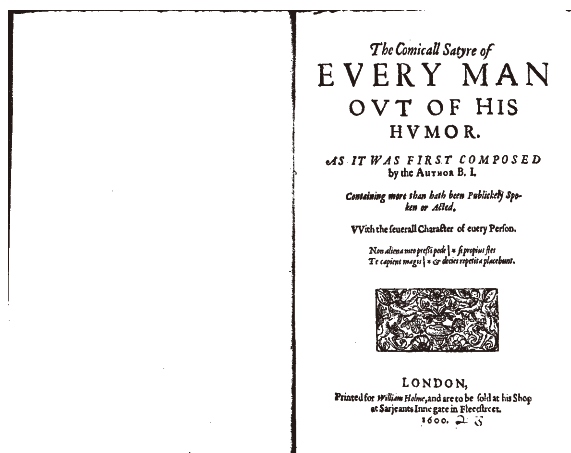
一般的に Henslowe には、劇作家——取り分け新人劇作家の経済的苦境の折に援助の手を差し伸べ、一種の子飼いの関係性を構築することで、自身の演劇興行に資するようなマネジメントを行う傾向があるように思われるが、Jonson の場合も例外ではないようである。Jonson が Henslowe から戯曲制作や加筆などの依頼を受けたケースを調査すると、先に言及した *The Isle of Dogs* 絡みの投獄や、1598 年前半期の困窮期などとシンクロナイズしていることが判明してくる。少なくとも Henslowe には、Jonson を海軍大臣一座（ノッティンガム伯一座）のための戦力の一部として囲っておきたい、との思惑が存在したと思われる。

しかし、すでに何度も検証してきたように、Jonson のポエティクスにとり、大衆演劇によるこうした「枷」あるいは拘束は、最も望ましくないものであっ

たはずである。Jonson自身の権威によって自ら認定した作品集である1616年の“*Workes*”の、巻頭に収録されたほどの*Every Man in*を、宮内大臣一座に持ち込んだ背景には、断定は難しいものの、このような心的機序・心理が控えていたと想定することには、それ相応の妥当性があると言ってよいであろう。

宮内大臣一座が*Every Man in*を受け入れるに当たっては、Shakespeare 仲介説が時に唱えられてきたが、その真偽はさておき、結果的にJonsonの初期氣質喜劇は、連続してこの一座の手で上演されることになる。しかし、Jonsonが宮内大臣一座のマネジメントと自己のポエティクスとに、折り合いをつけていたとは到底考えることはできない。それは、*Every Man Out*が上演された年の翌年1600年に、Jonson自らの手でクォート版が出版され、しかもそのタイトル・ページに、この印刷本のヴァージョンこそ*Every Man Out*の真正のテキストであることを、高らかに宣言する文言が明記されているからである。

初期近代の演劇産業において戯曲台本の著作権はまだ確立されておらず、その所有権は一般的に上演劇団が保持していたと考えられているが、Jonsonはこの慣行に敢然と挑戦し、自作戯曲への権利を完全なコントロール下に置こうとした訳である。Hensloweによる拘束を嫌い、宮内大臣一座との関係性の中で自己の目指すヴィジョンの実現を模索していたJonsonであったが、言うまでもなく彼のこの行動は劇団との間に軋轢を生じさせたであろうことは、想像に難くない。



この画像は*Every Man Out*, Q1のタイトル・ページであるが、それほどのリスクを冒してまで刊行したクォート版のタイトル・ページで、Jonsonは、この

テキストが作者の創作そのままのものであり、観客の前で演じられたもの以上のものを含んでいることを明言している。その上でさらに、Horatiusの*Epistles* (1. 19. 21-22) および*Ars Poetica* (361-65) からの3つの引用句が併記され、それらによってJonsonが代弁させようとした主旨は、自身のテキストのオリジナリティと、何度も鑑賞に堪える詩としての優れた価値、つまり読まれる対象としての作品の重要性であった訳である。

6. Jonsonの生計戦略

Jonsonが詩人としての自負心を前面に押し立て、そのポエティクスの実現をいくら図ろうとも、それだけでは生活してゆけないことは百も承知だったのであろう。もし一部の研究者が主張するように、Jonsonを怒らせ、詩人戦争勃発の一因となったものが、*Histriomastix*の主人公で、リベラル・アーツやヒューマニティーズの擁護者でありながら、学者貧乏的な表象をされていたChrisoganusであったとしたならば、Jonson自身、自作の*Every Man Out*の中において、有能な学者であるにもかかわらず十分な評価を得られないために、ねたみの発作を起こすMacilenteをおのれのペルソナとして登場させることで、自虐的な理解を示していたと言ってもよいであろう。実際、Jonsonは劇作家（あるいは、詩人）としてのキャリアを立ち上げる時、先に指摘したように、Hensloweの援助を幾度か受けていた訳であり、1598年9月の同僚の役者であるGabriel Spencerの殺害による投獄・全財産没収の折りには、煉瓦職人組合に加入し、生計の道を探ってもいた。⁵

では、*Every Man Out*執筆・上演前後の時期、すなわち、詩人としておのれの作品に対するコントロール強化を画策していた時期、Jonsonにはどのような生計戦略があり得たのであろうか。名門の出自でもない限り、初期近代イングランドの文筆家が取り得た選択肢・方策は極めて限定されており、それはざぱりパトロンの獲得であった。Jonsonの演劇界への参入の第一歩が役者であったことは、すでに言及した通りだが、近年の伝記研究によれば、Nasheとの共作で筆禍事件を起こした*The Isle of Dogs*を根拠に、1597年までにはJonsonはペンブルック伯一座を中心に活動していたと考えられている。⁶

このようにJonsonは、そのキャリアの初期からペンブルック伯と浅からぬ因縁があった訳だが、David Riggsによれば、この時期にJonsonが創作した宮廷人への献呈詩などから判断すると、Jonsonは、第二代ペンブルック伯Henry

Herbertとその妻Mary Sidney (Sir Philip Sidneyの妹)のみならず, Sir Philip Sidneyの娘でラトランド伯夫人であったElizabeth Sidneyや, Sidney家の遠縁に当たるベドフォード伯夫人Lucy Haringtonとも,すでに親交もしくは親交を求めての接触があったことが判明する.⁷ここに名前が挙がった貴族たちは,いわゆるペンブルック・サークルの宮廷人たちだが,彼等のような貴族とのパトロネッジの構築を通して, Jonsonは自らのポエティクスのための基盤の確立を目指していた訳である。

7. Jonsonとチャペル・ロイアル少年劇団

さて, こうした形で, ある程度の経済的基盤の確立に成果を上げたJonsonにとり, 次に目指したターゲットは, おそらく, 自身のポエティクスをより一層実現できる媒体と, その媒体による収益の確保であったと考えられる。

1599年の後半期から1600年にかけての時期——すなわち, Hensloweの枷を逃れ, たどり着いた宮内大臣一座ともトラブルを起こしていたであろうJonsonにとり, 活路を開く手だてとなり得る事態が演劇界で生じていた。それが, *Every Man Out*の直後と推定されるセント・ポール少年劇団の活動再開であった。少年劇団という存在は, その本来の聖歌隊としての出自・属性からして, マスターによって訓練を受け制御されるメディアであり, その発展形態としての演劇活動にあっても, 成人劇団と比較した時, 劇作家の立場から見れば——特にJonsonのようなポエティクスを信奉する劇作家にとっては, はるかにコントロールしやすい, 詩人のテキストを具象化してくれる媒体であり得たであろう。

そして, Jonsonにとり好都合なことに, セント・ポール少年劇団の再活動をにらみながら活動再開の機会を窺っていたのが, もう1つの少年劇団チャペル・ロイアル少年劇団であった。Michael Shapiroは, セント・ポール少年劇団の活動再開のファクターとして“profit”と“duty”を指摘しているが, Shapiroはチャペル・ロイアル少年劇団の復活の動因としてもこの2点に再度言及し, “commercialism”の重要性を強調している。⁸世紀転換期のこの時期に, 少年劇団は何らかの事情で活動再開を急いでいた訳だが, レパートリー不足を補うために彼等は, John Lylyの旧作やモラル・インターロード的な戯曲をリサイクルもしくはリヴァイズして利用していた。具体例を挙げれば, セント・ポール少年劇団は, *The Wisdom of Doctor Dodypoll* (1599) や *The Maid's Metamorphosis*

(1600) を、チャペル・ロイアル少年劇団は、*Love's Metamorphosis* (1600) や *The Contention Between Liberality and Prodigality* (1601) を上演したことが知られている。⁹

この、再開を急いでいたチャペル・ロイアル少年劇団の状況を裏書きする証拠として、この時期のマネジメント体制とそれにまつわる事件とについて触れておこう。1597年、William Hunnisからマスターを引き継いだ Nathaniel Giles (ウィンザー礼拝堂少年劇団のマスター) は、Henry Evansと提携を行う。¹⁰ このEvansだが、1600年9月、Richard Burbageからブラックフライアーズ座を借り受け、ここを本拠地とした活動再開の準備を行う。一方、Gilesの仕事は少年役者の追加的リクルートだったのであるが、強制徴発 (impressment) という手段を使用したため、Thomas Cliftonという少年の父親から訴訟を起こされている。¹¹ Gilesが少年役者の追加補充に走った理由は、再開直後の上演演目が要求する役者数を、当時のチャペル・ロイアル少年劇団が充たせていなかったからと考えられているが、このことは逆に、かなりの正確さを備えたプランニングに基づいて、劇団の再開計画が進められていたことを物語っていると見てよいであろう。

さて、こうした状況下にあった少年劇団だが、旧作のリサイクル以外にも、当然彼等は新作を提供し得る劇作家も求めていた。では、*Every Man Out* の1年後には手を組むことになる、Jonsonとチャペル・ロイアル少年劇団とを結びつけたのはどのような要因だったのであろうか。この課題について検証する際、Evansが新生劇団の拠点としたブラックフライアーズという場所と、その西方に近接していた法学院、取り分けミドル・テンプル法学院の重要性が浮上してくるものと考えられる。

先述したように、Jonsonは自らの手で*Every Man Out*の原稿をステイショナーに持ち込んだと思われるが、その相手はWilliam Holmeという人物であった。この書籍販売業者は1600年にQ1からQ3まで、1年間に3度もの異例の出版を試みるが、そのもくろみの下支えをしていたのが、サージャンツ・イン・ゲート (Serjeants' Inn gate) にあった彼の店舗が法学院に隣接していたという立地であり、諷刺文化の中心であった法学院関係者の「コミカル・サタイア」に対する嗜好性であった。¹²

詳しい経緯は判明していないが、この時期までにJonsonは4つの法学院すべてに知己を得ており、その中でもミドル・テンプル法学院のRichard HoskinsとRichard Martinとは特別に親密であったと言われている。¹³ そして、

後者のMartinは、1597-98年のクリスマス・シーズンに法学院関係者によって催されたレヴェルズの指導的役割を果たしており、また、この時に上演された演劇的余興が*Every Man Out*に与えた影響を指摘する研究も存在する。¹⁴

このように、Jonsonと法学院関係者との親密な関係、また法学院が諷刺文化の拠点であったという事実、さらには*Every Man Out*のクォート版が販売されたサージャンツ・イン・ゲートと法学院の所在地の近接性などを念頭に置いた上で、ブラックフライアーズでチャペル・ロイアル少年劇団の再興を画策していた、この時期随一の興行アントレプレナーであったEvansの思惑を考証する時、¹⁵新規の演劇的演し物として有望な諷刺文化の中核にいるJonsonと法学院の存在が、Evansの視界を大きく占有したと考えることは自然であると思われる。換言するならば、ブラックフライアーズ—サージャンツ・イン・ゲート—ミドル・テンブル法学院という、直線距離にして500m前後の空間が醸成していたであろう諷刺文化の磁場の重要性を、Jonsonとチャペル・ロイアル少年劇団との接点あるいは接触を分析するに当たって、改めて考えてもよいのではないだろうか。

本論では、Jonsonとチャペル・ロイアル少年劇団との関係性における法学院の重要性を最後に示唆したが、世紀転換期の少年劇団の活動再開における法学院のウェイトは、何もこの両者に限ったものではなさそうである。チャペル・ロイアル少年劇団に先行して復活したセント・ポール少年劇団のケースでも、Marston自身が法学院関係者であったことも含めて、この方向性の補助線を引くことが、何らかの知見をもたらしてくれる可能性はあると考えられる。

注

- * 本論は、平成29～32年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））「エリザベス朝王朝交替期における諷刺的文化環境の出現と演劇興行へのインパクト」（課題番号17K02490）の成果の一部である。
- 1 佐野隆弥、「少年劇団の活動再開とJohn Marston——法学院劇としての*Histrionastix*」，筑波大学大学院人文社会科学部研究科文芸・言語専攻、『文藝言語研究』，第73巻（2018年），pp. 19-34.
- 2 本論におけるBen Jonsonの戯曲からの引用は、David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson, eds., *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson* (Cambridge: Cambridge UP, 2012), vol.1に拠る。
- 3 中野春夫、「ジョンソンのパトロロンと「詩人」論」，玉泉八州男編『ベン・ジョンソン』（東京：英宝社，1993年），343-78頁。
- 4 *Cynthia's Revels* (Q), 2.1.33-51 参照。

- 5 David Riggs, *Ben Jonson: A Life* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1989) 53.
- 6 Riggs 20–22 and 26–28.
- 7 Riggs 67–68.
- 8 Michael Shapiro, *Children of the Revels: The Boy Companies of Shakespeare's Time and Their Plays* (New York: Columbia UP, 1967) 19 and 24–25.
- 9 Roslyn Lander Knutson, *Playing Companies and Commerce in Shakespeare's Time* (Cambridge: Cambridge UP, 2001) 56 and 101.
- 10 Hunnis と Evans は, Lyly と組んでオックスフォード少年劇団を立ち上げ, 1584 年の 1 月に Lyly の *Campaspe* を宮廷で上演している. 佐野隆弥, 「ジョン・リリーの出発——セシル, オックスフォード伯, 『キャンパスピ』——」, 英知明他編『シェイクスピア時代の演劇世界——演劇研究とデジタルアーカイヴズ』(福岡: 九州大学出版会, 2015 年), 77–91 頁参照.
- 11 Shapiro 24–25.
- 12 Holme のサージャンツ・イン・ゲートの店は, 1600 年から 1606 年の間営業していたが, *Every Man Out* の販売は正にその開店した年に行われたことになる. Holme に関する情報は, 慶應義塾大学の英知明教授から教示していただいた.
- 13 Riggs 56–57.
- 14 Helen Ostovich, ed., *Every Man Out of His Humour* (Manchester: Manchester UP, 2001), Introduction, 28–38; Ian Donaldson, *Ben Jonson: A Life* (Oxford: Oxford UP, 2013) 170–71.
- 15 Shapiro 16.

参考文献

- Appleton, Elizabeth. *An Anatomy of the Marprelate Controversy 1588–1596: Retracing Shakespeare's Identity and That of Martin Marprelate*. Lewiston: Edwin Mellen P, 2001.
- Baum, Helena Watts. *The Satiric and the Didactic in Ben Jonson's Comedy*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1947.
- Bednarz, James P. *Shakespeare & the Poets' War*. New York: Columbia UP, 2001.
- . “Writing and Revenge: John Marston's ‘Histriomastix’.” *Comparative Drama* 36 (2002): 21–51.
- Chambers, E. K. *The Elizabethan Stage*. 4 vols. Oxford: Clarendon P, 1951.
- Cousins, A. D., and Alison V. Scott, eds. *Ben Jonson and the Politics of Genre*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Dessen, Alan C. *Jonson's Moral Comedy*. Evanston, IL: Northwestern UP, 1971.
- Donaldson, Ian. *Ben Jonson: A Life*. Oxford: Oxford UP, 2013.
- Dutton, Richard. *Mastering the Revels: The Regulation and Censorship of English Renaissance Drama*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 1991.
- Finkelpearl, Philip J. “John Marston's *Histrio-Mastix* as an Inns of Court Play: a Hypothesis.” *Huntington Library Quarterly* 29 (1966): 223–34.
- . *John Marston of the Middle Temple*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1969.
- Foakes, R. A., ed. *Henslowe's Diary*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- Gair, Reavley. *The Children of Paul's: The Story of a Theatre Company, 1553–1608*.

- Cambridge: Cambridge UP, 1982.
- Harbage, Alfred. *Annals of English Drama 975-1700*. Rev. S. Schoenbaum. London: Methuen, 1964.
- Harp, Richard, and Stanley Stewart, eds. *The Cambridge Companion to Ben Jonson*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Haynes, Jonathan. *The Social Relations of Jonson's Theater*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Ioppolo, Grace. *Dramatists and their Manuscripts in the Age of Shakespeare, Jonson, Middleton and Heywood*. London: Routledge, 2006.
- Jonson, Ben. *Ben Jonson*. 11 vols. Ed. C. H. Herford, Percy Simpson, and Evelyn Simpson. Oxford: Clarendon P, 1925-52.
- . *Every Man Out of His Humour*. Ed. Helen Ostovich. Manchester: Manchester UP, 2001.
- . *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*. 7 vols. Ed. David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson. Cambridge: Cambridge UP, 2012.
- Knutson, Roslyn Lander. *Playing Companies and Commerce in Shakespeare's Time*. Cambridge: Cambridge UP, 2001.
- Lamb, Edel. *Performing Childhood in the Early Modern Theatre: The Children's Playing Companies (1599-1613)*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2009.
- O'Callaghan, Michelle. *The English Wits: Literature and Sociability in Early Modern England*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Riggs, David. *Ben Jonson: A Life*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1989.
- Rowe, George E. *Distinguishing Jonson: Imitation, Rivalry, and the Direction of a Dramatic Career*. Lincoln: U of Nebraska P, 1988.
- Sanders, Julie, ed. *Ben Jonson in Context*. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- Shapiro, Michael. *Children of the Revels: The Boy Companies of Shakespeare's Time and Their Plays*. New York: Columbia UP, 1967.
- Simons, Jay. *Jonson, the Poetomachia, and the Reformation of Renaissance Satire: Purging Satire*. New York: Routledge, 2018.
- Simpson, Richard, ed. *The School of Shakspeare*. 2 vols. London: Chatto & Windus, 1878.
- Wiggins, Martin and Catherine Richardson. *British Drama 1533-1642: A Catalogue*. 8 vols. Oxford: Oxford UP, 2012-7.
- Yearling, Rebecca. *Ben Jonson, John Marston and Early Modern Drama: Satire and the Audience*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2016.
- 佐野隆弥. 「John Lylyの後期喜劇に関わる政治的環境と少年劇団——*Midas* (1589) を事例として」. 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究』第71巻 (2017年). pp. 89-106.
- . 「少年劇団の活動再開と John Marston——法学院劇としての *Histrionastix*」. 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究』第73巻 (2018年). pp. 19-34.
- 玉泉八州男編. 『ベン・ジョンソン』 (東京: 英宝社, 1993).